

元気に声を出し合おう（４年）

春のうた

指導目標

言葉の使い方を工夫して、読み、話し合い、書く。

○冬眠から目覚めたかえるの喜びや情景を想像しながら、自分がかえるになったつもりで、言葉の抑揚や調子を工夫して音読する。（読むこと）

○言葉のリズムやつながり、技法や観点などを手がかりに、詩がつくる想像の世界の楽しさ、音読する喜びを味わう。（読むこと、言語事項）

教材について

1 教材設定の意図

４年生ともなると、子供たちは自立心や仲間意識が強くなり、想像世界や認識世界にも広がりや深まりを見せはじめる。本教材は、そのスタートとなる４年生の学級開きで、楽しく想像し合うことで心の響き合いを、楽しく音読し合うことで声の響き合いを学級につくり出すことを意図している。

その意味で、春になった喜びを全身で表現するためにオノマトペ（擬声語や擬態語）を駆使し、春の喜びをいっぱいにうたいあげている『春のうた』、そして、自由な想像の楽しさやものごとをとらえる発想の転換のおもしろさが自然に伝わってくる『あり』の詩は、意図にぴったりである。

詩は、短くて手軽に読めるものではあるが、長文の散文と同等にその作品世界は独立し完結しており、言葉がつくり出す詩の心は広くて深い。また、散文が意味性を基調とするのに対して、詩は五感を中心とした感ずる心としての感性を基調としている。そのだれもがもっている感じる心こそは、自然や社会の事物や現象をどうとらえるかという認識する力を高めていく始まりと考える。

この詩との出会いを出発点に、年間をとおしているいろいろな詩との出会いを国語の時間ばかりでなく、いろいろな場や機会を意図的に設定し広げていきたい。

2 たしかに豊かに読むために

詩を読むことにも多くの言葉の力が要求される。それはまた、詩を読むことをとおしてたくさんの言葉の力をつくり、他の学習に生かすことができるということでもある。そこで、詩を自力で読むことをめあてに、次の三点を指導の原則として取り組みたい。

- 1) 繰り返し声に出して読むこと：言葉の響きやリズム、詩の心を音読で表現する。
- 2) 言葉や表現技法にこだわって読むこと：詩の心や想像世界は技法に支えられている。
- 3) 詩の心を深める観点をもって読むこと：詩の心のベースとなる見方や考え方。

3 『春のうた』（作・草野心平）について

この詩では、「音読」を中心に「表現技法」や「読み深める観点」を関連させながら、学習を進めたい。

1) 繰り返し声に出して読む

この詩を学習した子供たちは、一様に「一人で読んでも楽しい、二人で読んだらもっと楽しい、みんなで読んだらもっともっと楽しい。」と言う。また、「みんなで読んでいくと、うれしい気持ち

がどんどん大きくなる。」とも言う。そこで、いろいろな手立てで繰り返し音読することを第一のめあてとした。

こうすることによって、この詩の心はどんどん広がり深まっていく。それは、蛙語とも言われる草野心平のオノマトペ（擬声語や擬態語）のたくみさ、対句や繰り返しが、かえるの再び新しい春に出会えたという喜びの繰り返しとなり、どこまでも広がっていく歓喜となっていくからである。それを、

「一番最後の行の『ケルルンクック。』という声は、どこまで響いたろう？」

と問うことで、繰り返される「ケルルン クック」の声の強さ、声の高低、声の清濁等に気をつけ、空いっぱい、春の世界いっぱいに広がる歓喜の声を音読表現しようとする思いとなっていく。（別紙資料）

2) 言葉や表現技法にこだわって読むこと

どう読むのか、どう声に出すのかは、児童自身がこの詩を一人で読み、詩の心を受け取らなければならない。その手がかりはまず、技法を駆使して表現された詩の言葉そのものにある。

詩の本文は、平明な言葉ではあるが、実に多くの表現技法が駆使されている。しかもその一つ一つがどれも重要なはたらきをもっている。それをとらえる目や力を育てるために、初期の段階では、「音読して気づいたこと」、「視写して気づいたこと」と、だれもが見い出すことができる表現をあげさせることから始めたい。例えば、

- ・句点が全部の行についている
- ・四つの連でできている
- ・題名と詩の間に説明(前詞)^{まえことば}がある
- ・一字空きがある
- ・平仮名書き
- ・「ケルルン クック」が片仮名
- ・対句がある
- ・オノマトペ（擬声語、擬態語）が多い
- ・繰り返しが多い ...

そして、これらの効果を考えさせたり話し合わせていくと、想像の世界がどんどん広がっていくことが実感できるようになっていく。

3) 読み深める手だて

4年生の子どもたちの知識や認識の広がりには、一方で思考や判断の類型化や一般化、常識化へと流れやすい危険性をはらんでいる。特に、自然の変化や日々のできごととはあたりまえのこととして、驚きや感動をもって受け止めることは少なくなっているように思える。しかし、小さな変化やできごとをきちんと言葉でとらえ、表現することなしに物事への認識を深めることはできない。そこで、音読の指導に加えて、以下のような手だてで読み深め、具体的に認識する力を高めていく一助としたい。

「だれ（何）がいる？」と問い、登場人物や登場する物事から読み深める。

- ・形状
- ・大小
- ・表情
- ・数
- ・五感のはたらかせ方
- ・言動
- ・心的状況 ...

「どこにいる？」と問い、場所や位置、外的状況、体や心的状況などから読み深める。

この詩の場合、特にここを重視したい。蛙は今、冬の間過ごした土の中から、そっと顔を出して地上の春の世界をかいま見、外へ出てくる瞬間である。それは、暗から明へ、苦しみから楽しさへ、悲しみから喜びへ、束縛から自由へ、冷たさから温かさへなどである。そのことは、死から生へ帰還し、再生を果たした喜びの真ただなかにいることを示している。

さらに、それは草野心平がこの詩を作った当時の、外的・心的状況そのものなのであり、どのような題材であっても、詩は自分自身を表現しているといえるのである。

「比べてごらん。」と問い、対比や変化や異同、比喩や象徴等の技法から読み深める。

春と冬の対比、土の中と外の対比、土の中の蛙と外へ出た蛙の対比などを児童の実態に応じ

て取り上げたい。

「どこをはたらかせている？」と問い、五感のどこをはたらかせてイメージをつくっているかを明らかにして読み深める。

・オノマトペ（擬声語，擬態語）や色彩語など，具体的な言葉や表現の工夫の効果にかかわること，その効果。

学習指導計画（全2時間）

教材名・時	学 習 活 動	留 意 点
春のうた (1時間)	1, 題名読みをする。 2, 繰り返しやオノマトペ等の技法を生かして音読する。 3, 前詞や詩から，かえるがどこにいるのかを話し合う。 4, 3を受けて音読を工夫する。 ・一人で音読 ・対話的な音読 ・班で群読 5, 全員で群読する。	・春という季節について。 ・声の強弱，高低，抑揚等。 ・状況と思いを重ねる。 ・声の重なりや響き合いをつくる。 ・最後に全員で群読する。
あり (1時間)	1, 題名読みをする。 2, 音読を工夫する。 ・一人で音読 ・対話する音読 ・班で群読 3, 音読発表をする 4, 「ありっこない詩」を書いて発表する。 5, 作者について知る：生き方を知り，別な詩を読む。	・現実のありを思い描く。 ・声の強弱，高低，抑揚等。 ・かけあいを楽しむ。 ・工夫点を強調する。 ・自由な想像を楽しむ。

本時の展開 「春のうた」(1/2)

○目標

- ・冬眠から目覚めたかえるの喜びや情景を想像しながら，自分がかえるになったつもりで，言葉の抑揚や調子を工夫して音読する。
- ・言葉のリズムやつながり，表現技法などをとらえながら，かえるの状況や思いをさぐって話し合うことができる。

○展開例

学習活動（教師はたらきかけと児童の反応）	留意点・評価及び方法
1, 題名読みをする。 1) 春はどんな季節かな？ ・雪が消える ・暖かくなる ・うれしい ・草や花が芽を出す ・花が咲く ・にぎやか ・虫たちも出てくる ・新しい学年になる ・1年生が学校にくる 2) 春が来て，うたいたくなるのはだれだろう。 ・草や花 ・さくらの木 ・虫たち ・冬眠していた動物 ・1年生 ・わたしたち 2, 『春のうた』の詩の部分を持示する。 1) 何度か音読し，気づきや思いを発表する。	「春がくるとどうなる？」という発問でもよい。 【関】自分の体験をふりかえって，発言しようとしている。（発言） うたは心の表現であることを意識させる。 前詞をかくして持示する。 「だれがいる？」と補助発問してもよい。

- ・これだれだろう ・きっと蛙だよ
 - ・うれしくてうたってる ・にこにこしてる
 - ・「ほっ」て驚いている ・いぬのふぐりって何
 - ・まぶしいのは土の中から出てきたから
 - ・うれしくて叫んでる
- 2) 「ここを見てごらん」と前詞を見せる。
- ・やっぱり蛙だ ・土の中から出て来たんだ
 - ・冬眠からさめた ・だからうれしいんだ
- 3) 詩をノートに視写する。
- ・1字空きがある ・四つの連がある
 - ・どの行にも句点がついてる ・全部平仮名だ
 - ・同じ言葉が何度も出てくる
 - ・「ケルルンクック」が4回も出てくる
- 3 , (地面を表す横線と冬眠していた穴を書いて)
- 1) かえるは今、どこにいるだろう？
- ・穴出た所 ・一連では穴から顔を出した。
 - ・二連は穴から完全に出て春を感じている。
 - ・三連はきよろきよろあっちこっちを見ている。
 - ・四連は空を見て「ケルルンクック」と叫んでいる。
- 2) 穴の中と地面の上(地上)を比べてごらん。
- ・穴の中は、暗くて、寒くて、冷たくて、じめじめ、一人ぼっち、さみしい、何も見えない、食べ物がない、眠っているだけ、冬、凍る、苦しい、動けない、死ぬかもしれない
 - ・地上は、明るくて、暖かくて、きれいで、仲間がいろいろいる、友達もいる、いろいろなものが見える、まぶしくて輝いている、自由に動ける、いろいろな生き物がいる、どこへでも行ける、食べ物もある
- 4 , そんな地上にかえるは出てきた。そのうれしい気持ちや喜びが伝わってくるように音読を工夫しよう。
- 1) 一人で読み方を工夫して音読する。
- ・声の強弱 ・声の高低 ・遅速 ・間
 - ・言い切りや余韻など
- 2) 二人でパートを工夫して音読する。
- ・うれしい気持ちが高まるように工夫する。
 - ・二人いっしょに読む部分を工夫する。
- 3) 全員でパートをきめて群読する。
- ・驚きや感動を強調するように工夫する。
 - ・最後の「ケルルンクック」の響きを大きくする。
- 5 , 題名の「春のうた」の春を別な言葉で言ったらどのようになるか考える。

- そう思った理由も簡単に取り上げる。
- 気持ちや思いははどの言葉にくっついてるか考えさせる。
- いぬのふぐりの絵や写真を見せる。
- 【話・聞】表現や他の人の発言から、かえるの状況をとらえて話し合いを深めている。(話し合い)
- 冬眠について確かめる。
- 【書・言】表現技法に気をつけながら、視写している。(ノート)
- 技法の効果にも簡単にふれる。
- 春をどこで感じているかもたしかめる。
- ・一連(目と心で)
 - ・二連(手や体全体で、目で、鼻で)
 - ・三連(目で)
- 春の世界の広がりを、地面の横線に半円を書いて表す。
- 対比することで、カエルの心情に寄り添うことができる。
- 【話・聞】穴の中と地上を対比し、かえるの状況について考えを交流し合い、詩を読み深めている。(話し合い)
- うれしさや喜びが伝わってくるように音読させる。
- 蛙になりきった音読に挑戦させる。
- 音読記号を使って書き入れる。
- パートを指示してもよい。
- 【読】冬眠から目覚めたかえるの様子を想像しながら声に出して読んでいる。(音読)
- 特に最後の「ケルルンクック」をどう読むか、話し合わせる。
- 声の重なりや響きができるように読ませる。
- 【態度】場面の様子が伝わるように、協力して音読を工夫しようとしている。(群読)

<p>「〇〇のうた」</p> <ul style="list-style-type: none">・喜びのうた ・うれしいうた ・かえるのうた・自由になったうた ・生きてるうた ... <p>作者の草野心平さんの気持ちは？</p> <ul style="list-style-type: none">・かえると同じ	<p>【読】かえるの思いを，適切な言葉で表している。（ノート，発言）</p>
--	--

評価

- ・冬眠から目覚めたかえるの喜びや情景を想像しながら，自分がかえるになったつもりで，楽しく音読しようとしている。（態度）
- ・詩の内容や表現技法を生かし，言葉の抑揚や調子，パートなどを工夫して音読しようとしている。（読む）
- ・穴の中と地上の世界を対比してとらえ，かえるの喜びを強く大きくする話し合いをしている。（話す・聞く）

参考資料

二人で音読する場合の工夫例

題名	(全) 春のうた
作者	(全) 草野心平
前詞	A かえるは冬のあいだは土の中にいて 春になると地上に出てきます。 B そのはじめての日のうた。
1 連	A ほっ (全) まぶしいな。 B ほっ (全) うれしいな。
2 連	A みずはつるつる。 B かぜはそよそよ。 A ケルルン クック。 (全) ああいいにおいだ。 B ケルルン クック。
3 連	(全) ほっ A いぬのふぐりがさいている。 (全) ほっ B おおきなくもがうごいてくる。
4 連	(全) ケルルン クック。 (全) ケルルン クック。

音読記号例 (教科書p.112を参考に)

- ・間 《
- ・速く
- ・強く ———
- ・抑揚 ———
- ・言い切る
- ・高い声で
- ・ゆっくり -----
- ・弱く ~~~~~
- ・のばす ~
- ・低い声で

《音読の工夫》

- ・各行とも語尾をのばさず、句点で言い切る。
- ・顔や目の高さを変える工夫
- ・顔の表情や動きをつくる工夫
- ・手や体全体の動きをつくる工夫
- ・「ほっ」は、後に続く詞によって強弱を工夫する。
- ・「ケルルン クック」はだんだん強く高く発声する。特に最後の「ケルルン クック」は、空や地上にあふれる春の世界に響きわたるように澄んだ声で高く強く発声する。

学級全員で音読する場合の工夫例・1

題名	(男) 春のうた
作者	(男全) 草野心平
前詞	(女) かえるは冬のあいだは土の中にいて 春になると地上に出てきます。 (女全) そのはじめての日のうた。
1 連	(男) ほっ (男全) まぶしいな。 (女) ほっ (女全) うれしいな。
2 連	(男) みずはつるつる。 (女) かぜはそよそよ。 (男全) ケルルン クック。 (女) ああいいにおいだ。 (女全) ケルルン クック。
3 連	(男) ほっ (男全) いぬのふぐりがさいている。 (女) ほっ (女全) おおきなくもがうごいてくる。
4 連	(男) ケルルン クック。 (学全) ケルルン クック。

学級全員での群読例・2

表 の 声	かげの声
<p>題名 (男) 春のうた 作者 (男全) 草野心平 前詞 (女) かえるは冬のあいだは土の中にいて 春になると地上に出てきます。 (女全) そのはじめての日のうた。</p>	
<p>1連 (男) ほっ (男全) まぶしいな。 (女) ほっ (女全) うれしいな。</p>	<p>(女) 土の中は暗かった (男) 一人ぼっちでさみしくて</p>
<p>2連 (男) みずはつるつる。 (女) かぜはそよそよ。 (男全) ケルルン クック。 (女) ああいいにおいだ。 (女全) ケルルン クック。</p>	<p>(女) 寒くてつめたくて (男) こおりそうだった (女) 苦しくて死にそうだった</p>
<p>3連 (男) ほっ (男全) いぬのふぐりがさいている。 (女) ほっ (女全) おおきなくもがうごいてくる。</p>	<p>(男) 早く地上に出たかった (女) 春がくるのを待っていた</p>
<p>4連 (男) ケルルン クック。 (男全) ケルルン クック。 (女全) ケルルン クック。 (学全) ケルルン クック。</p>	<p>(女全) 春だ。 (男全) 春だ。 (学全) 春がきたんだ。</p>